

タイトル	北海学園大学人文学会第2回記念シンポジウム記録 歴史学と歴史的事実：フランス史における動向を中心に
著者	仲松，優子；NAKAMATSU, Yuko
引用	北海学園大学人文論集(59)：38-46
発行日	2015-08-31

歴史学と歴史的事実 — フランス史における動向を中心に —

仲松優子

はじめに — 歴史的事実とは何か

北海学園大学人文学会第2回大会では、安酸敏真『人文学概論 — 新しい人文学の地平を求めて —』(知泉書館, 2014年)を題材に、各分野から人文学の可能性を議論することが趣旨となっています¹。本報告は歴史学の立場から、本書の第10章「時間・記憶・歴史」に着目します。ここでは、19世紀のドイツの歴史家レオポルト・フォン・ランケの主張とこれに対する同時代の批判を中心に、歴史学における歴史研究者の客観性の問題が取り上げられています。本報告では、これをふまえて、歴史的事実とは何かという問題が、歴史学ではどのように議論されてきたのかという点について、フランス史における動向を中心に整理し、近年の歴史学の可能性について考察していきます。

まず、ここでは歴史的事実がなぜ問題となるのかという点について整理しておきたいと思います。歴史学は、過去に何があったのか、あるいは過去の社会はどのようなものであったのかという点を明らかにする学問であると一般的には考えられているでしょう。もちろん、こうした事柄は、歴史学の目的の最も重要なものの一つであり、最終目標ということもできます。しかし、歴史研究は、その「歴史的事実」に到達するために、様々な手続きを取ることになるのであり、その手続きのいかんによって、そこからみえてくる「歴史的事実」が異なってくるということが起こりえます。

ここで「歴史的事実」を規定していくのは、歴史研究の際に依拠する史料と、歴史研究者の思考の二つの側面に整理することができます。フラン

スの歴史研究者ロジェ・シャルチエは、自らの研究テーマである読書の文化史と関連させて、書物の分析においては表象 (représentation) 行為を明らかにすることが重要であると指摘しました²。同じくフランス史研究者の二宮宏之は、この見解を歴史学の営みの問題へと発展させ、歴史研究とは①史料の表象を②歴史研究者が表象するという、二重の表象行為であるとしました³。歴史研究においては、史料を紐解いていくことになるわけですが、その史料は過去の社会の全てをみせてくれるのではなく、史料の書き手を通して社会の一部が提示されているにすぎません。また、史料に向き合う歴史研究者は、時代と社会に制約された存在であり、そのなかで史料を読み解き、歴史を叙述します。すなわち、「歴史的事実」に近づくには、この二つの表象行為が存在していることを、歴史研究者は意識し、これを乗り越えていく必要があるわけです。

ただし、このような歴史の捉え方は、19世紀の前半以降の歴史研究をめぐる議論を経た結果なのであり、きわめて今日的さらにはヨーロッパ的な歴史の捉え方といえるかもしれません。本報告では、こうした歴史的事実をめぐる議論が、19世紀以来今日までどのように推移していったのかという点を、特にフランス史における動向を中心としてみていくこととします。

そして、次に、現在の歴史研究の可能性の問題を考えます。現在は、歴史学の危機の時代と呼ばれることが多いのですが、それは、先にみたように「歴史的事実」に到達することの困難性がとりあげられるようになったからです。しかし、歴史研究における客観性が議論の対象となることによって、新たに切り開かれた研究の地平が存在していることも確かです。本報告では、このような歴史学の現在と可能性について、最後に考察していくこととします。

1. 「実証主義」歴史学の誕生

近代歴史学が形成された19世紀前半において、ヨーロッパの歴史研究の

中心地は、後にドイツを構成する地域でした。この地域は、ナポレオン1世の時代にフランスに支配されたため、民族の歴史を擁護する「ドイツ歴史学派」の活動が活発化し、これが近代歴史学の形成を導くことになりました。

この時代に、近代歴史学が形成された背景には、もう一つ当時の歴史学をとりまく知の状況をあげることができます。18世紀末まで、大学における歴史学は、哲学に対して従属的な地位にあり、歴史研究者は歴史学を独立的な近代学問として確立することを模索していました。そこで中心となって活躍したのが、ランケだったわけです。彼は、歴史哲学への対抗から、知の進歩を可能とするのは歴史の意味についての思索ではなく、経験主義的な事実の研究であると主張しました⁴。ランケを代表者とする「実証主義」歴史学とは、歴史学が一つの学問領域として確立するための模索の結果生まれた方法といえるでしょう。

ここでいう「実証主義」歴史学は、歴史学に「科学性」を担保するための試みだったといえます。それは、歴史研究の際に根拠となる史料にたいして、さまざまな角度からその史料の来歴や「信憑性」を問う、史料批判の方法の厳密化の技術を鍛え上げるものでした。その方法の確立への志向が、歴史学を他の分野と異なる独自の学問として確立すること、すなわち近代歴史学の誕生へとつながっていったのです。

この「実証主義」歴史学は、後に、歴史学の客観性があまりに単純に信奉されていたと、フランスのアナール学派によって批判されます。しかし、フランスの歴史家ジェラルド・ノワリエルは、批判されているランケについて、彼は歴史学における主体と客体の関係の重要性を最初に指摘した思想家であると、反論しています⁵。

「実証主義」歴史学が、歴史研究における客観性をどのように考えていたのかという問題を、フランスの「実証主義」歴史学においてみてみましょう。フランスでは、ロマン主義の影響を強く受けていた歴史学に、「科学性」を担保することを目的に、ドイツよりも半世紀遅れた19世紀後半に、「実証主義」歴史学の方法が広がっていきます。ドイツの「実証主義」を独自

に展開させながら形成された、この時期のフランスの「実証主義」歴史学の成果として、シャルル＝ヴィクトール・ラングロワとシャルル・セニョボスの共著による『歴史学研究入門』をあげることができます⁶。本書では、歴史家の主観性と、史料の主観性がともに考察の対象とされています。そのうえで、これらをできるだけ排除し「歴史的事実」に到達するために、史料批判の技術が具体的に検討されているわけです。本報告の最初に、歴史研究には二重の表象行為が介在するという見解を紹介しましたが、19世紀の「実証主義」歴史学において、すでにこうした歴史の考え方が垣間見られるといえるでしょう。

ただし、後のアナル学派の主張との違いは、『歴史学研究入門』では、歴史研究の出発点に史料が存在することが、強調されていることでしょう。歴史家が何か見解をもって史料に向き合うことは、史料の理解をゆがめることにつながるとし、避けるべきであると考えられています。アナル学派による「実証主義」歴史学への批判を、次にみていきながら、両者の違いをさらに検討していきたいと思います。

2. アナル学派の誕生

フランスでは、1929年ストラスブール大学を拠点に雑誌『社会経済史年報』、通称『アナル』が創刊され、これを中心としてアナル学派が形成されていきます。アナル学派の主張にはさまざまな要点が含まれ、また現在まで存続している雑誌なため、時代によってその主張の中身はかわってきますが、ここでは、そのなかでもまずは初期の主張を、「実証主義」歴史学との関係からみていきたいと思います。

雑誌『アナル』の創設者の一人であるリュシアン・フェーヴルによると、これまでの歴史学は、「科学」の名のもとに、文書史料から事実を確定し、それを組み合わせることによって歴史を構成していました。しかし、歴史家は常に事実を選択しているのであり、フェーヴルはむしろ歴史家の問いや問題設定があってはじめて、歴史は存在するのだと主張しました⁷。

彼は、こうした主張にいたった理由として、これまでの歴史研究に対する疑問だけでなく、「科学」への疑義の発生や、第一次世界大戦を経験したフランス社会における歴史学無用論への危機感を、あわせて述べています。歴史学が危機的状況にあるという認識のもとに、歴史研究者の問いが価値のあるものとされている点が重要でしょう。歴史研究には主観性がともなうとする見方は、先にみたとおり「実証主義」歴史学と同じですが、異なる点は、それが排除されるべき事柄ではなく、むしろ肯定的にとらえられていることです。

その後、雑誌『アナル』の発行は、第二次世界大戦中も名称を変更しながら継続され、戦後の特に1950年代後半からは、フェルナン・ブローデルを中心に、その影響力を拡大していきます。しかし、ブローデルの時代には、長期にわたって作成された同質の史料を大量に数量処理し、歴史を構造としてとらえる見方が広がります。こうした数値化による史料の処理の方法は、歴史研究者に歴史学と主観性の問題に向き合うことを軽視する態度を引き起こしました⁸。再びフランスの歴史学界で、歴史学と主観性および客観性の関係が激しい議論の対象となるのは、1970年代および80年代以降となります。

3. 1970年代および80年代の転換

1970年代および80年代の変化は、おもに歴史学という学問領域の外部から歴史学への批判というかたちで引き起こされました。フランスでは、1970年代および80年代より、歴史をどのように書くのかという歴史叙述の問題が、思想史や哲学の領域で議論されるようになります。

さらに、アメリカでは文学批評の専門家らが、歴史学の叙述の形態を分析することにより、歴史を物語の一形態とみなし、歴史をフィクションと同列におく議論が展開されます。また、言語学の方法を用いる研究者たちからは「言語論的転回」とよばれる見解が生まれ、すべての実存は言語を媒介として表象され、これによって成り立つ言説空間は自律性をもつと主

張されました。こうした立場から、歴史的事実が確固として存在している
と信じる歴史学に、批判が向けられるようになります。

このような歴史学への批判は、本報告の最初でみてきた19世紀の「実証主義」歴史学からすでに問題とされてきたことと、一部が重なっているようにみえます。すなわち歴史学には史料においても、また歴史家の作業の場においても主観性がともなうという議論です。しかし違う点は、歴史的事実は、言説やテキストの外部に存在しているのか否かという問題が提出されたことでしょう。こうした批判に、歴史学がどう応答したのかという点を次に整理していきたいと思います。

4. 歴史学の応答

歴史学においても、こうした議論を受けて、言説の重要性が認識され、言説の力に注目する研究が進められていきます。しかし、基本的な争点であった、すべての実存は言説を媒介としたかたちでのみ存在し、歴史的事実は存在しないのかという点については、歴史研究者の多くは、すべてが言説に還元されることはないと反論しているといえるでしょう。例えば、シャルチエは、アメリカ発の「言語論的転回」に早くから関与していた歴史研究者といえますが、彼もまた言説が意味をもつ社会的空間を重視しています。シャルチエは、個人や共同体の言説や行為が、社会によって強制され規範が与えられ、約束ごとにとっている、と主張しています⁹。言説は社会と切り離されて存在しているわけではなく、この点をふまえれば、歴史研究が史料にもとづき歴史的事実に接近することは十分に可能であるといえるでしょう。社会によって規定されている言説の主体や、言説の受容と読解、そして言説の社会的文脈に対する考察を深めていくことが、「言語論的転回」以降の歴史学では求められるのではないのでしょうか。

また、「言語論的転回」は、歴史学の「危機」とよばれる状況と結びついて考えられがちですが、歴史学における客観性をめぐる議論が深まったことで、歴史学に新たな可能性がもたらされたことも確かです。第一に、歴

史研究を行う歴史研究者自身が、社会的存在であることがあらためて認識されたことです。歴史研究者もまた、身分や階級、人種やジェンダーによって規定された存在です。これまでの歴史学で重視されていた事柄は、主観的なものと認識されることにより、別の歴史の書き方が可能となります。ただし、どのような歴史の語りも許されるということであれば、すべての語りが並列におかれてしまいます。語りをめぐる権力関係も同時に研究の対象にするべきであると考えます。

第二に、「歴史的事実」に主観性がまわりつくことが、逆に積極的な意味を持ち始めたことは、歴史研究の新たな研究領域を広げることにつながったといえるでしょう。これまでの歴史学において、史料としては客観的でなく使用できないとされていたものに、史料としての可能性が発見されることとなります。主観的な語りや記憶もまた、歴史研究にどのように取り入れることが可能なのかという問題が生じてきます¹⁰。また、これまで「真」ではなく「偽」と判断されてきた史料には、その生成過程に光をあてることによって、史料に関係する人々の利害や権力関係、駆け引きというものを浮かび上がらせ、その点に社会の現実をみるということが可能とする考え方も出てきました¹¹。この方法は、おもに古文書学において発達し、「言語論的転回」から影響を受けたために派生したものではなく、専門家たちの仕事のなかで生じた変化であることを、付言しておくことも必要でしょう。

おわりに

以上のように、歴史的事実をめぐるのは、19世紀の近代歴史学の確立期から現在まで、さまざまな主張と議論が展開されてきました。これを追っていくと、歴史学の「危機」は、「言語論的転回」以降に限定されるわけではなく、実はほとんど常に存在し続けたようにもみえます。歴史学の内部であるいは人文社会科学との間で繰り広げられた批判と応答をとおして、歴史学とはどのような学問であり、そこで到達しようとする歴史的事実と

は何か、という問題についての認識が深められていったことが確認できません。

しかしながら、そもそも歴史的事実が確固として存在しているのか否かということが、問題になった点で、1970年代および80年代以降の歴史学は大きな挑戦を受けたといえるでしょう。この場合、歴史学の固有の技術と社会的責務を考えることは避けてはとおれないと思われます。シャルチエは、歴史がフィクションと同義ではないことの理由として、歴史学は古文書に依拠し、学問に固有の「科学性の基準」をもっていること、そしてそれにもとづいて厳密な知識を確立するという目標があるとしています¹²。「科学性」に対する認識を深めながら、学問固有の方法論を考えることが、歴史学の「危機」を脱するためには必要ではないでしょうか。

注

- 1 2014年11月22日、北海学園大学豊平校舎にて開催。当日の大会テーマは「人文学の新しい可能性(2)——安酸敏真『人文学概論』を読む——」。
- 2 ロジェ・シャルチエ「表象としての世界」ジャック・ルゴフ他(二宮宏之編訳)『歴史・文化・表象——アナール派と歴史人類学——』岩波書店、1992年、171-207頁。
- 3 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」『二宮宏之著作集 4』岩波書店、2011年、15頁。
- 4 ジェラルド・ノワリエル(小田中直樹訳)『歴史学の「危機」』木鐸社、1997年、56頁。
- 5 前掲書、104頁。
- 6 シャルル=ヴィクトール・ラングロワ、シャルル・セニヨボス(八本木浄訳)『歴史学研究入門』校倉書房、1989年(原著の初版は1897年公刊)。
- 7 リュシアン・フェーヴル(長谷川輝夫訳)『歴史のための闘い』平凡社、1995年。
- 8 ロジェ・シャルチエ(藤田朋久訳)「今日の歴史学——疑問・挑戦・提案——」『思想』843号、1994年、7頁。
- 9 前掲論文、11頁。
- 10 大黒俊二「逆なで、ほころび、テキストとしての社会」森明子編『歴史叙

- 述の現在——歴史学と人類学の対話——』人文書院，2002年，287頁。
- 11 前掲論文，295-297頁。
 - 12 シャルチエ前掲論文「今日の歴史学」，16-19頁。